

〔愚管抄五〕承安元年十二月十四日、この平大相國入道盛が女を入内せさせて、やがて同じ二年二月十日、立后中宮とてあるに、皇子を生せまいらせて、いよく帝の外祖にて、世を皆思ふさまにとりてんと思ひけるにや、様々の祈どもしてありけるに、中略安藝國嚴島を、ことに信仰をた
りける、はや船をつくりて、月詣を福原より初て祈りける、

〔信長公記九〕天正四年、先年佐和山にて被作置候大船、一年公方様御謀叛之砌、一度御用に立られ候、此上者大船不入之由にて、猪飼野甚介に被仰付、取ほどき、早舟十艘、二作をかせられ、中略

〔太閤記十三〕朝鮮陣人數賦之事

敬白起請文前書之事中略

一物見之疾舟、一大將より二艘宛出し可申事中略

卯月元文祿十年十月

各連判にて、宛所は奉行衆也、

〔駿府政事録五〕慶長十九年十月廿三日、卯剋永原出御、自矢橋召早船格四十艘、膳所、戸田、左門、於船中獻御膳、

〔玉露叢十二〕寛永十四年十一月九日ニ、天草ヨリ男女トモニ二千七百餘人船ニテ著岸申シ候、將亦大江ノ濱ニアル處ノ舟ドモヲ殘ラズ打コハシ候テ、城ノ塀ノ圍ニ住リ候、三十丁ダチ々早舟ヲ一艘計リ殘シ置申候事、

〔倭訓栞中編八〕こはや。小早の義、萬葉集に、足早の小舟とよめる是也、楊子方言に、小舸謂之舩とあり、

〔和漢船用集三〕舟名數海船、小早。小早舟也、今舟の字略して呼歌に、足早の小舟とよめるものなり、楊氏方言に、曰、小舸謂之舩、注に、云、今江東に舩を呼で小底とする也、又、舩船と云と見へたり、小底とするは、其船の底小を以て云なるべし、舩船は、字彙に、釣艇ツリボネとす、又、船の名と見へたり、舩船或は